ISSN 0285-9823

女子大國文

第百七十二号

令和五年一月発行

二〇二二年度公開講座
観阿弥・犬王から世阿弥へ ……田口和夫（一）
――世阿弥自筆能本〈江口能〉の成立――
固原漆棺の孝子伝図について(中) ……黒田彰（二〇）
京都大学附属図書館清家文庫蔵『月令抄』一本 …田上稔（四四）
冰青居蔵品図録（古筆切編）……池尾和也（六一）
――定数歌・歌会歌（二）――
彙報 ……（一〇八）

京都女子大学国文学会

女子大國文 第百七十二号 令和五年一月発行 京都女子大学国文学会

女子大國文 第百七十二号
令和五年一月十五日 印刷
令和五年一月三十一日 発行
〒六〇五-八六〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地
編輯兼発行者 京都女子大学国文学会
電話 〇七五-五三一-九〇七六
FAX 〇七五-五三一-九一二〇
振替 〇一〇八〇-五-三一一四
〒六〇二-八二四六 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社
電話 〇七五-四一一-四一一〇八(代)
FAX 〇七五-四三一-六一八二

彙　報

○女子大國文第一七二号をお届けします。
○新入生歓迎行事、公開講座の感想文を掲載しました。

研究室だより

○今年度の公開講座は、対面とZoomミーティングを併用し、ハイブリッドで開催させていただきました。

二〇二二年度国文学会行事（後期）

○公開講座
十一月七日（月）午後一時より　於J420教室
「観阿弥・犬王から世阿弥へ―世阿弥自筆本〈江口〉の成立―」
文教大学名誉教授　田口和夫先生
「一冊の中を、人々はどう歩いたか？～江戸文芸にみる公共圏とその記録について～」
早稲田大学特命教授　ロバート　キャンベル先生

※田口先生より、御講演内容を本号に御寄稿賜りました。

新入生歓迎行事　能楽鑑賞会観覧記（六月十八日）

※「全体」「装束」「囃子」「狂言」「能」「歴史」のパートに分けて、執筆していただきました。

能と狂言の世界に触れて（担当：全体）

一回生　金　井　覚　加

私は初めて能と狂言を観た。能とは何なのか。狂言との違いは何なのか。全く知らない私であったが、事前学習と能楽師の丁寧な説明により私は人並みに鑑賞することができたと思う。

「能」。一つ一つ分解しながら書いていこうと思う。まず私の目には、美しい西陣織の能装束が映った。朱赤に染められた絹糸と金糸が上品な艶を発していた。その上にひっそりと座っている小面（女面）は我こそ能の主役なりと主張しているようにみえた。立方（たちかた）が最初に私を非日常の世界へ連れていった。次に私を不思議な気持ちにさせた事は、その右で鼓を横に静かに座っている地方（じかた）（地謡、お囃子）だった。黒紋付袴が舞台によく映えていた。立方が動き回る側で三、四人の地方が鼓や笛を鳴らしている光景が不思議だった。耳には、地謡の長く重たい歌が聞こえていた。ホールに響く地謡は立方をより引き立たせるような役割を持っていた。目を瞑って唄だけに集中するのもいいかもしれない。

「狂言」。こちらは、肩の力を抜いて観ることができた。笑いを誘うものだった。こちらも衣装は黒紋付袴だった。シテとアドの声は不思議だった。あの声が狂言の世界を作っていた。謡はなく、シテとアドのやり取りだけなので、話の速度は能よりも早かった。シテとアドそれぞれが大きな存在感を持っていた。仮面をせず、生きた人間が表情を作るので、観ている者も緊張した気持ちになりにくい。しぐさは、ゆっくりと重さを感じたのだが、穏やかで軽みのある口調が動きに軽快さを与えていた。劇中、アドがシテに酒を注ぐ場面があるのだが、その場面で使われる照明に照らされた扇が、とても酒の輝きのように見えて驚いた。扇がいろいろなものに変わる様子が面白かった。

能も狂言もそれぞれ素晴らしい空気があった。今想い返しても晴れやかな素敵な気持ちになる。大学生の始まりに日本の伝統芸能である能と狂言に触れることができ、嬉しく思う。

伝統芸能に触れて（担当：全体）

一回生　篠　原　瑠　那

新入生歓迎会の能楽鑑賞で初めて能と狂言に触れた。全体を通して新しい知識や体験がたくさん得られた。

まずは着付けについて。高校生の時に歌舞伎は役柄によって隈

取りの色が違うことを知った。能でも役柄を衣装の色や模様によって表現することを知り、伝統芸能の表現方法には共通点があり、驚いた。六条御息所を表現するために白の付け襟で高貴な女性、鱗箔の着物で般若などその登場人物がどのような人で、物語の中でどのように変化するのかが分かるようになっていて面白いと思った。また、般若に変化するときに「高貴な女性なのであまり髪を乱さないようにしている。」との説明を聞いて形式的な女性、般若という形だけでなく、六条御息所というキャラクターに合わせた工夫がされていて細かいところまでこだわりがつまっていると感じた。

次にお囃子について。お囃子は音の出る位置の高さの順番で並んでいて、雛飾りの五人囃子の並び順と同じだと初めて知った。小鼓は湿気のある方が音の鳴りが良い楽器で、大鼓は乾燥している方が音の鳴りが良い楽器らしく、同じ舞台で使うものなのに適した環境が異なっていて管理が大変だと思った。また、演奏の方法などが口伝らしく室町時代から現代まで受け継がれていることに驚いた。それぞれの楽器に専属の人がいるが、修行の段階で全部の楽器を演奏するらしく、演奏するのが難しい楽器すべてに触れるのは大変だと思った。

そして狂言について。今回は登場人物と大まかなあらすじ、狂言の楽しみ方を教えてもらってからだったのでより一層楽しめたと思う。最近ではネタバレ禁止のようなものが多いが伝統芸能はある程度作品の概要を知ってから見る方が楽しむことができると思った。伝統芸能は難しいもので見ても内容が理解できないかもしれないと思っていたが、今回の鑑賞会で少し身近に感じることができた。また、初めて伝統芸能に触れるには狂言が一番楽しむことができるのではないかと思った。

最後に能「橋弁慶」について。一般的に知られている五条大橋の物語では弁慶が悪役とされているものだが、この「橋弁慶」では牛若丸が悪役になっており新鮮だった。舞台の床を踏み鳴らす音の大きさや、役者さんの声の大きさ、緊張感など実際に目の前で見ないと感じることができないものを体験することができた。これまで能楽というものに触れたことが無く、難しい世界だと思っていたが、また機会があれば伝統芸能と言われるものを見に行きたいと思った。

能楽鑑賞会に参加して（担当：装束）

一回生　勝　目　彩　華

このような機会がなければ、自分が今生活している範囲で知ることのできないことばかりで面白かったです。高校生の時に一度

だけ授業で能を見たのですが、「なんかすごかった」というような記憶しか残っていませんでした。そのため、目の前で説明を受けつつ演目を見るのは本当に貴重な体験だったなと思います。

私が特に興味をひかれたのは装束についてです。まず、着付けは二、三人がかりで一人に着付けをし、着付けをする人、される人の連携が大事なのだと学びました。また、舞台上で激しく動くので、帯だけで固定するのではなく、針と糸で縫って固定するなどの工夫がされていました。和服の着付けは、てろんとした着物を重ねて帯で締めて固定するだけだと思っていたため、こんなに手間がかかることを知って驚きました。そのほかにも、演目によって違いはありますが、例として出された『源氏物語』の「葵上」という演目の六条御息所の場合は、美しい女性の姿と生霊の怖い姿があるため、下に生霊の衣装を着て、上に女性の着物を着ていました。美しい女性の着物（上の着物）も三角形を並べた「鱗」模様で激しい嫉妬や執着心を表し、生霊であることを示唆しているため、能の知識があれば演目の元ネタを知らなくても予測して楽しめるのかなと思いました。「葵上」では葵上はでてこずに伏せられた着物の上着で描写されたり、黒子をいないものとして扱う、着替えの際の白い布で隠されているのは見えないとして考えるなど、「見えるのに見えない」という感覚が新鮮で楽しかったです。個人的に一番印象に残っているのは、般若のお面の話です。結婚式で白無垢の下のおでこにひもをまくのは、晴れの日くらいは般若のお面のように怒って角を出さないようにという思いからそのようになっているらしい、と知りました。般若が女性の怒った顔だというのは知っていたのですが、まさか結婚式に話がつながるとはおもってもいなかったので驚いたし、面白いなと思いました。

能装束は昔からずっと受け継がれているもので、昔の人が代々丁寧に扱ってきたおかげできらきらとした今があるのだと思うと、装束を通して能楽師の方の思いを感じることができました。

お囃子とその楽器についての
お話を聞いて（担当：お囃子）

一回生　林　沙那

今回、新入生歓迎行事として能楽鑑賞会を開催していただきました。コロナ禍で伝統文化に触れる機会が減っている中、zoom開催ではありましたが能と狂言について様々な側面から知ることの出来る貴重な機会を頂いたことを嬉しく思います。その上、私は学会でのお手伝いを兼ねて対面で鑑賞させていただきました。どのお話も非常に興味深いものでしたが、私はお囃子についての

感想を述べたいと思います。

お話を聞いている中で、お囃子の楽器の性質は非常に特徴的であることに気づきました。例えば、最初に「オヒャリヒョーイヒャーリヒー」といった歌を覚えたのち指を習うという独特な習い方に興味をそそられました。このような方法で多くの人が曲を習い、それが現代まで伝わったことに、伝統に対する尊さを感じました。また、一般的な楽器とは違って小鼓のほうが大鼓より音が低く、小鼓が湿気を好むのに対し大鼓は乾いた状態を好むというお話を聞き、同じような形状の楽器が対照的な特徴をもつことが面白いと思いました。どちらの素材も、動物の皮という点では同じであるのに、どうしてこんなに扱い方や音が異なるのか不思議に思いました。

今回のお話の中で特に印象的だったのは、どうして専業のシテ方である講師の方々が、囃子を演奏できるのかというお話です。その理由は、一人前になるための修行過程で、全ての役割について稽古をするからだそうです。お互いの役割を知ることで、呼吸のあったよりよい舞台が完成するということを知りました。

今回、能と狂言の鑑賞に加えて着付けやお囃子など、本来役者の方しか知らない裏話を沢山うかがうことが出来て、能と狂言の魅力をより深く感じることが出来ました。普段触れる機会がないので楽しく鑑賞できるのか不安でしたが、分かりやすく気さくに話してくださる講師の方のおかげで、能と狂言を身近なものに感じることが出来ました。新型コロナウイルスの流行が落ち着けば、また鑑賞に足を運びたいと思います。

「狂言」の印象の変化（担当：狂言）

一回生　中　井　花　実

能と能の合間に演じられる、わかりやすい演劇というのが、今まで私が持っていた狂言の知識だ。幼い頃、私はあるテレビ番組で狂言を見た事があったが、幼かった私はその面白さが今ひとつ分からなかった。そのため、今回もあまり興が乗らなかったのだ。しかし、間近で見た狂言は、今までの「面白くないだろう」というイメージを払拭する程のものだと感じた。

当日、狂言のことについて解説していただいた後に、実際に演じていただくという流れだった。狂言とは何たるかを説明していただいた中で、特に興味深かったのは「わからない言い回しがあっても気にせず見続けてほしい」という演者の方からのお言葉だ。その言葉に私は面食らった。由緒正しい伝統芸能であるにも関わらず、気軽な気持ちで見てもいいものなのかと考えたからである。そうは言われたもののいまだ緊張している私を差し置い

て、その後も解説は続いた。そしていざ鑑賞というときに、私の中の緊張は一気にほぐれていった。活気のある雰囲気や大きな動作、豊かな表情を前にして緊張などとてもしていられなかったのだ。端的に言ってしまえばとても面白かったのだ。「歌を歌え」という主人の絶対的な命令を、どうにかして切り抜けようとする奉公人のコミカルな行動におもわず笑みが漏れた。それにより私が今まで持っていた悪いイメージはあっさり霧散し、「今度は自主的に見に行ってみようか」と考えてしまうほどである。

能や狂言と聞くと「敷居が高い」と身構えて敬遠してしまう人もきっといることだろう。かつて私もそう思っていたが、今回の鑑賞会でその考えは大きく変わった。伝統的なものに触れ、味わう。それに楽しみを見出せるようになったのだ。次は何に出会えるだろうかと今から楽しみである。

能楽について（担当：能）

一回生　林　百合子

初めて能楽を生で鑑賞する機会をいただき、そして能楽の虜になった。

今回鑑賞させていただいたのは、曲目「葵上」と「橋弁慶」の二つだ。曲目も迫力があって面白く、ここに記したいことが山ほどあるのだが、「葵上」で最も印象深かったことを挙げさせてもらう。

曲目「葵上」は、葵上への一方的な嫉妬や恨みを持つ六条御息所が、鬼女に変貌し、葵上の命を奪おうとする場面である。その場面でとりわけ強い印象を受けたのは、葵上を襲おうとする六条御息所の足取りである。

足を高い位置まで上げ、ゆっくりと足を振り下ろす。同じ場所で規則正しくトントントンと鳴らしていたかと思えば、突然体の向きを変えてスーッと足音も出さずに違う方へと進んでいく。御息所の足取りには規則性がなかったのだ。私は、どこへ向かうのか全く読めない、不規則な足の動きに最も恐怖を感じた。

逆に、葵上とは遠い位置で体を微動だにせずじっと葵上を見つめていた時には、思わず背筋が凍った。テンポが速くなるお囃子の笛や、徐々に大きくなっていく太鼓の音も相まって不気味さが倍増し、見入ってしまった。

舞台の端から端までまで張りつめていた只ならない緊張が、それが舞台を超えて客席にも確実に伝わっていた。

これらの動きが演技であると頭の中でわかっていても、見ていた時は本当に怖かった。六条御息所が進路を変え、いきなり客席のほうへ襲ってくるのではないかと本気で思ってしまい、体も硬

直してしまったことを覚えている。

見るのが怖くなって目を瞑っても、耳から否応なくお囃子が流れ込んできて、いてもたってもいられなかった。

今思えば、すっかり能楽の世界観に呑み込まれていたのだろう。

曲目が終わった頃にはなぜだか疲労感に襲われており、座って鑑賞していただけなのにかなり息が上がっていた。さっきまで自分が見ていたものは夢だったのではないか。もう一度あの緊張感を味わいたいとすぐさま思った。また、あの舞台を、呑み込まれるような異様な雰囲気を一から人の手で作り出していたことに驚いた。

能楽師さんのお話によると、実際の能楽の歴史は室町時代にさかのぼるらしい。六百年前の人々も、私たちが鑑賞した曲目を鑑賞し、同じように感じていたのだろうか。能楽を鑑賞し、感じた能楽の面白さが時を超えて、室町時代を生きた人々と私たちを繋げてくれたような気がした。

今度は自分の足で能楽堂へ出向き、もう一度鑑賞しに行きたい。

能の歴史（担当：歴史）

一回生　土　井　菜　々　子

能楽鑑賞会が新入生歓迎行事として行われ、私は能に初めて生で触れました。コロナ禍という情勢のためオンラインでの開催となりましたが、学会委員として生で参加できたことをありがたく思います。大変貴重な経験をすることが出来ました。今回私は「能の歴史」というトピックを取り上げました。

今や能は日本の有名な伝統芸能ですが、ここまで発展するのには深い歴史があります。まず能が生まれたのは一四〇〇年、室町時代です。室町時代の前半と後半で能に大きな違いがみられたことが私はとても印象に残りました。室町時代前半では、能はただのものまねのようなふざけた芸能であったのにもかかわらず、後半になると高尚で複雑な芸能に発展していきます。戦国時代にも武将たちの娯楽の一種として楽しまれます。最初はふざけたものまねだったにもかかわらず、武将にも受け入れられるような芸能に発展したことに素直に能の凄さを感じました。戦国時代は徳川家康によって保護され、行事の時に行う「式楽」にもなります。しかし、明治時代は日本にとって激動の時代に入っていきます。そのため、近代は戦争などの影響から娯楽の部分が強い能は無駄

なものとして切り捨てられるようになってしまいます。確かに日本のこの時代を考えると能を切り捨てるという考えは仕方がないことだと思いました。しかし、一度はピンチを迎えた能が今現在も残っているのは、能を残そうと尽力した人々がいたからです。

私は、能の歴史を学びこんなにも能に深い歴史があったことを初めて知りました。日本史は小学校から授業で学びますが、能にスポットを当てて歴史をみたことは今までなかったので新しい視点を増やすことが出来ました。能がここまで続いてきたのには多くの歴史があり、紆余曲折を繰り返しながらではありますが今現在の日本を代表する伝統芸能に発展していったことに私は驚くと同時に、だからこそ今も大切にされている文化なのだと思いました。能などの伝統芸能に触れる機会はそんなに多いものではありませんが、少しでも自分から関心を示しそのような機会を増やしていきたいと思います。普段は触れることが少ないものだからこそ、今回の能楽鑑賞会は私にとって非常に貴重な良い体験となりました。

公開講座聴講記（十一月七日）

公開講座を受けて

三回生　井阪未来

大谷先生の近世ゼミで、今回の公開講座ではロバート・キャンベル先生に講義を行っていただくと聞き、驚きました。普段メディアでよく目にする方の講義を受けることができる機会はめったになく、非常に貴重な経験です。どのような講義をされるのか、受講する前から楽しみにしていました。

ご講演は「一冊の中を、人々はどう歩いたか？　江戸文芸にみる公共圏とその記録について」というテーマで、江戸文芸やその記録を通して当時の人々の文芸に対する関わり方と「公共圏」について学ぶというものでした。当時、作品が作られた際は完成祝賀会として書画会や席画会が行われており、そのような空間の中で文化がつくられるようになっていました。その集まりがどのようなものであったかは、会の招待状などの片々とした後々までは残りにくい資料を見ることで知ることができることから、様々な観点から文化史を見ることが必要だということでした。

「公共圏」という言葉がキーワードとして用いられていましたが、私はこの言葉を聞いたとき文化人の交流の場である「サロ

ン」を連想しました。ですが、お話を聞いていくと「公共圏」は知的で風雅なものに限らず、俗事も政治も語り合われる自由で雑然とした場所であり、身分が定められておらず誰でも参加できるものだと分かりました。自由な個人を尊重している点が近代的だといえますが、そのために統制がかかってしまうこともあったようです。

講演では、実際に使われていた当時の招待状を見ることができる資料として、東条琴台の『焦後鶏肋冊』が紹介されました。これは、百以上の書画会の招待状などが貼られているもので、現代のスクラップブックにあてはまります。所狭しと貼られた招待状は私が想像していた堅苦しいものとは全く異なり、様々なデザインでユーモアのあるものばかりで、現代のチラシやフライヤーと同じようだと感じました。挿絵を見ると、行われる会がどのようなコンセプトのものかも理解できます。また、これほど多くの招待状を保存していたということからは、東条琴台が積極的に会に関わっていたことも読み取ることもできます。このようなことから、当時は会が楽しいイベントのように行われており、「サロン」とは異なる近代的なあり方の「公共圏」だったことが分かりました。

キャンベル先生のお話を聞くことで、一つのものを理解するためには様々な視点から見ることが必要だということを再認識しました。また、異なる時代に生きた人は遠い存在だと捉えてしまいがちですが、その実際の姿を知ることで現在と共通する部分もあることに気付くことが出来ると分かりました。

二〇二二年度公開講座を拝聴して

三回生　伊藤安未

今回の講座では、ロバート・キャンベル先生の「一冊の中を、人々はどう歩いたか？～江戸文芸に見る公共圏とその記録について～」を拝聴しました。江戸時代以降、一般公衆によって書画会という書と絵画の展覧会が盛んに開かれていたということ、そして実際に行われていた書画会の輪郭を、同時代の資料を基に明らかにしていく過程についてお話をしていただきました。

書画会という言葉を今回の講座で初めて知りました。現代において芸術に触れるという場面を想像した時、一番初めに浮かぶのは文化施設や展示会に行って静かな空間で展示品と向き合うというイメージなのですが、料亭や神社仏閣という場で行われ、人々が寄り集まって交流し、飲食や酒宴を伴うこともある書画会の在り方を知って、そのような芸術との触れ合い方が存在していたのかと驚きました。

ご紹介があった資料のうち特に印象的だったのが、東條琴台の『焦後鶏肋冊』です。この本は彼への会の招待状や会の記録資料が集められたスクラップブックです。当時の日本にスクラップブックが存在していたことに驚きました。その中に、天保三年の『書画蒼粋』という本の出版を記念した書画会の図がありました。文芸に関わる人々が寄り集まって賑わいを見せている様子が描かれています。

この図に関して、いくつか興味深い点がありました。まず、人が空間に密集している点です。人と人との距離が近いことから、人同士の交流も密になっているのだということがうかがえます。見ているだけでもその場の活気や人々の熱量が伝わってきました。次に、人々がバラバラの方向を向いている点です。現代における鑑賞の場では、人々は大体決められた方向を向く傾向にあると思うのですが、書画会では制作、鑑賞、購入、物々交換、交流など人々が多様な動きをしていることから、あらゆる方向を向いています。次に、人々の中に女性も存在している点です。書画会は性別や年齢、身分を越えた存在であったというお話を聞いて、より多くの人に開けた空間であったのだと思いました。

お話の最後に、本来残りづらいものを基に考えていくことは難しいことであるものの、それによって見えてくる世界があるのだとおっしゃいました。『焦後鶏肋冊』は、スクラップの寄せ集めであり、東條琴台があえて残そうとしなければ残らないような資料なのだと思います。ロバート・キャンベル先生は、御研究の中で書画会の輪郭を明らかにするため、著名な資料だけではなく、困難であっても後世に残りにくい個人的な資料を大切になさっており、研究の姿勢として非常に勉強になりました。

公開講座を拝聴して

三回生　大佛サト

今回の公開講座では「観阿弥・犬王から世阿弥へ―世阿弥自筆能本〈江口〉の成立―」と題し世阿弥自筆能本である〈江口能〉がどのように作られたのか。また、〈江口〉と〈室君〉という二つの能の関係についてお話を拝聴した。

わたしは犬王の存在を恥ずかしながらつい最近知ったばかりだったが、犬王は現在では観阿弥世阿弥親子より贔屓されていたというのが常識の考えであると知ることができた。

講座の本題である〈江口能〉は観阿弥がすべて作ったと考えられていたが、世阿弥作の能の特徴として統一イメージが存在しており、それが〈江口〉にも存在していることから観阿弥だけでなく世阿弥も書き加えて完成したものだと考えられるようになっ

た。実際講座中台本の中に書かれた「月」や「舟」という統一イメージの箇所に〇を付けていったところそれらが書かれている所と書かれていないところに分けられ興味深く感じた。

また、この〈江口〉の演目は〈室君〉と構造が似通っているところも問題に挙げられた。〈室君（竿ノ哥）〉は犬王作の天女舞の能で、〈江口〉の成立論の中には〈室君〉が〈江口〉に先行するという説もある。さらに、世阿弥は〈竿ノ哥之能〉（室君）を書写している。なぜ世阿弥は書写したのか。この理由として、当時「舞＝天女舞」というイメージが定着していたことが考えられる。天女舞は犬王のものだったが、先生のお話では観阿弥が亡くなる時に世阿弥に「天女舞を大和猿楽に取り入れるよう」と遺言を残し、そのことがきっかけで天女舞を入れたと考えられていた。その後犬王の天女舞を脱皮する新しい「菩薩舞」を創造し完成したのが現在の〈江口〉であるとされる。

今回の講座は『世阿弥自筆納本集影印編・校訂編』を見つつ拝聴していたが、「観音」や「歌舞の菩薩」を消して「普賢」とした跡が見て取れ、世阿弥が大和猿楽独自の舞を模索した様子が伝わってくるように思えた。翻刻されたものだけでなく自筆本を見ることで作者が何に影響を受け、どのように模索し、完成させたのか読み取り、研究していくことができると分かった。いままで翻刻されていないものは避けがちだったが、影印されているものを読む楽しさを知ることができ、これからは挑戦していきたいと講座を通じ感じることができた。

公開講座聴講記（二〇二二・一一・七）

三回生　酒井智永

今回の田口先生の公開講座「観阿弥・犬王から世阿弥へ―世阿弥自筆能本〈江口〉の成立」にて、能「江口」にどのような訂正があったのか、犬王が世阿弥にどのような影響を与えていたのか、というお話を拝聴しました。

田口先生の講座では、まず観阿弥作とされる「江口」において、複数の節で世阿弥の統一イメージが見られるとのお話がありました。世阿弥が訂正した節には「月」「船」といった全体に通じる事象があり、各節ごとにそのような統一イメージあるか否かで、世阿弥の執筆部を判別することができる、という見解を興味深く聞かせていただきました。観阿弥執筆「江口」と世阿弥が自筆本で訂正した「江口」には他にも違いがあり、観阿弥作の能「江口」では、遊女が最期に観音となって極楽往生を果たすという終わり方だったと考えられていますが、世阿弥自筆本にて最終的に江口の君が「カンノン」から「フゲンボサツ」と書き変えら

れています。この観音から普賢菩薩への変化について、訂正前の「江口」は、犬王「室君（竿ノ歌之能）」の天女舞から着想を得ている可能性があるとのことでした。犬王は観阿弥・世阿弥にも勝るほど義満らに重宝された能界の第一人者であるということにも驚きましたが、世阿弥が犬王の構造を取り入れて「江口」初案を練ったという影響関係が大変興味深く感じました。最終的に犬王を基にした天女舞が普賢菩薩の舞となったのは、いわば世阿弥のオリジナリティであるといえるのではないかと考えました。

田口先生の公開講座を通しては、その見解内容に限らず、「節ごとの差異から世阿弥の執筆を見極める」「変化の過程を遡って考える」といった田口先生の考察の進め方も非常に勉強になりました。私は中世ゼミにて狂言を学んでおりますが、狂言にも「末広がり」の構成のように、「この話を基に書かれた作品だろう」と考えられる作品が数多く存在しています。そういった作品を扱う際には、今回の公開講座で学んだことを活かして考察を深めていきたいと思います。

『女子大國文』投稿規定

一、（投稿資格）

① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。

② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、（刊行回数・時期・投稿の締め切り）

① 毎年二回、九月と一月に刊行する。

② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする（厳守）。

三、（投稿の枚数）

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚（注・表・図版などを含む）を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする（多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可）。

四、（投稿に際して提出すべきもの）

① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部（審査用。二部ともコピーしたものでも可）。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部（審査用）と、投稿原稿が収められている電子データ（ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること）。

五、（投稿に際しての注意事項）

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、（本学教授）（本学大学院博士後期課程）（本学文学部国文学科四回生）などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること（採否の知らせや校正送付等のため）。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個

人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

③　原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、（投稿先）

〒六〇五―八五〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三五番地
京都女子大学国文学会
『女子大國文』編集事務局

七、（投稿論文の採否）

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、（校正）

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、（本誌・抜き刷りの贈呈）

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、（掲載論文の著作権及び電子媒体による公開）

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、（規定の改正）

①　本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。

②　規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・中島和歌子・山中延之

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果三点が掲載となりました。

また、文教大学名誉教授の田口和夫先生に、公開講座の御講演内容を御寄稿賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

前号（第一七一号）の「編集後記」におきまして、査読委員の方の御名前に誤りがございました。次の通り訂正させていただきます。

（誤）峯村志津子

（正）峯村至津子

（中西・宮崎）